

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red

Cross Kyushu International College of

Nursing

看護大学生ピアエデュケーターによる小学生への性  
教育活動の試み：  
年齢差のある対象へのピアアプローチとその評価

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 日本赤十字九州国際看護大学 公開日: 2013-01-17 キーワード (Ja): 看護大学生, 性教育, ピアアプローチ, 小学生 キーワード (En): nursing college students, sex education, peer approach, elementary schoolchildren 作成者: 濱田, 維子, 小林, 益江, 佐藤, 珠美, 江島, 仁子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15019/00000084">https://doi.org/10.15019/00000084</a>

著作権は本学に帰属する。

## 報告

# 看護大学生ピアエドゥケーターによる小学生への性教育活動の試み —年齢差のある対象へのピアアプローチとその評価—

濱田維子<sup>1)</sup> 小林益江<sup>1)</sup> 佐藤珠美<sup>1)</sup> 江島仁子<sup>1)</sup>

ピアエドゥケーションの特徴は、同世代の仲間意識の共感・支持による教育効果が高い点と、知識提供だけではなく個人の自信や自己評価を高めることを目標としている点にある。本学では、2004年度より、大学生ピアエドゥケーターの養成とともに、大学生による小学生への性教育活動を展開している。小学5年次から6年次にかけて2年間の継続的な授業展開を通して、子どもたちへの質問紙や感想をもとに授業評価を行い、小学生へのピアアプローチの効果について明らかにした。その結果、①小学生と年齢差のある大学生とのコミュニケーションを重視した活動展開によって、両者の関係性を構築することができた。②複数の大学生が体験談を語るという共感的アプローチによって、授業内容の理解が促進された。③自己肯定感の向上を目的とした授業展開により「自分を好きだ」といえる子どもが増加した。以上のことより、小学生とのコミュニケーションを重視したプログラムと、年齢差のある対象者に対しても、関係性を重視したピアアプローチによる効果的な性教育が可能であることが示された。

キーワード：看護大学生、性教育、ピアアプローチ、小学生

## I はじめに

児童の性(生)に関する問題は、小学生の性被害増加やマスメディアから溢れる性情報、いじめや自殺など多岐にわたると同時に深刻化している。しかし、学校現場においては、様々な教育課題が課せられ多忙を極めていたり、性教育に対する個々の価値観の違い、また、一部、突出した性教育への批判の高まりなどにより、性教育の必要性を感じながらも具体的な取り組みが遅れているのが現状である。

ピアエドゥケーションは、より年齢が近く価値観を共有できる存在(Peer)による健康教育であり、親や教師が行うそれと異なり、同世代の仲間意識の共感・支持によって、態度変容や行動変容が起こることが利点とされている<sup>1)</sup>。また、知識提供だけではなく、普段あまり意識していない自分自身や家族、異性、友人などについて客観的に考える機会をつくり自信や自己評価を高めることも期待している<sup>2)</sup>。

WHOの報告によると、1977年には諸外国でこの手法による思春期保健への取り組みがはじめられており<sup>3)</sup>、わが国では、21世紀の母子保健の主要な取り組みを提示する「健やか親子21」において、思春期

の性の問題に対する有効な技法の一つとして推進されている<sup>4)</sup>。以降、医学・看護系大学を中心に大学生ピアエドゥケーターが養成され、地域の中・高校生を対象としたピアアプローチによる性教育が展開されている。その効果は、各地で多くの報告がなされている<sup>5)~7)</sup>。

本学では、平成16年度より、母性看護学領域の教員と地域のK小学校との連携により、看護大学生による小学生への性教育事業に取り組んでいる。大学生ピアエドゥケーターが年齢の離れた学童期の子どもたちを対象に性教育を実施した例はなく、事業開始当初は、授業企画以前に、対象学年の理解力の把握から取り組むといった手探り状態でのスタートであった。しかし、2年間の継続的な活動を通して、看護大学生が小学生を対象に、ピアアプローチによる性教育を行うメリットが明確化されたので、報告する。

## II 事業内容

### 1. ピアエドゥケーターの養成

本学の学生によるボランティア活動としてスタートした性教育活動の中で、ピアエドゥケーターとしての能力を備えた学生の養成に努めた。

1) 日本赤十字九州国際看護大学

ピアエデュケーターの養成は、日本家族計画協会主催のピアカウンセラー養成者研修を終えた教員が、毎年、宿泊研修を含めた一連の研修会を企画・実施している。研修会の目的は、実践のための方法論のみではなく、大学生自身が性を肯定的にとらえ、自分の性について考えることに焦点を当てている。ピアエデュケーター養成研修会の概要は表 1 に示す。

また、学生主体の定例学習会や、地域の子育てネットワーク主催の「性を語ろう会」への参加、他大学のピアサークルメンバーとの交流会等に加え、学生個々の相談窓口として適宜担当教員による面接を行うなど、学生のエンパワーメントの向上に努めている。

研修は性教育に興味を持つ学生の自由参加とし、そのうち、毎年 10 名前後の学生がピアエデュケーターとして活動している。

**表 1 ピアエデュケーター養成研修会 内容概要**

1) 学内研修 (15 時間) ①ピアエデュケーションとは ②セクシュアリティ概論 ・人間にとっての性・性の多様性 (ジェンダーアイデンティティ) ・思春期の性と最近の動向 他 ③コミュニケーションスキル (講義と演習)
2) 宿泊研修 (15 時間) ①セクシュアリティ各論 ・妊娠と避妊・性感染症 他 ②性の自己決定とコンドームネゴシエイトスキル (講義と演習)

## 2. 小学校との連携

小学校でのピアエデュケーションの実施にあたっては、校長と対象学年のクラス担任の承諾を得た上で、授業運営のための協力を得ている。

1) 対象の児童に合った授業内容にするため、学校での授業進行度や生活、理解力、各クラスの特徴や個人差について、クラス担任から必要な情報や助言をもらっている。また、事前に、大学生と対象となる子どもたちとの関係性を築くために、授業を担当する学生は数回にわたって小学校に出向き、給食や休み時間を共に過ごしている。

2) 授業内容は、大学生が主体となって作成した授

業案を柱としているが、個々の子どもを熟知したクラス担任の要望に応じて、毎回、柔軟に対応している。1つの授業企画については、2回以上の打ち合わせ会議をもち、その都度、大学生、小学校教員、大学教員とのディスカッションを重ねている。

3) 授業終了直後には各クラス担任と共に授業評価を行い、可能であれば修正を加えて、次のクラスでの実施に臨んでいる。

## 3. 授業の実際 (表 2)

授業は、「自分と相手を大切にしよう」というメインテーマを基盤に、性に関する科学的な知識提供だけではなく、家族や友人といった人間関係の中で自分自身の大切さ、他者の存在の大切さを伝えることを目的としている。小学 5 年生から 6 年生の 2 年間で、①二次性徴、②受精のメカニズム、③妊娠・出産、④薬物乱用防止の 4 回にわたる授業展開 (計 4 コマ) を行った。

薬物乱用については、性の問題と同様に子どもの自己肯定感が影響する課題として、現在の学校教育の中で重要視されている。また、内閣府の「平成 18 年度薬物乱用対策に対する世論調査」によると、青少年の薬物乱用の原因について、インターネットや携帯電話による密売により薬物を入手しやすくなっているという意見が増えており、学校での教育強化が望まれている。<sup>8)</sup> 今回は、クラス担任からの要請もあり、卒業前の 6 年生を対象に薬物乱用防止教育を実施している。

各内容の詳細は、クラス担任のニーズに合わせて検討しているため、毎年少しずつ異なる。

初回は学年単位に授業を実施したが、その後は、より効果的な方法を目指して、クラス単位に授業を行った。授業評価はクラス担任との振り返りと、各授業前後および 6 年次における質問紙調査によって行った。なお、授業は、各クラス担任による調整で、総合学習や理科、体育等の科目の位置付けで設定している。各授業は保護者への公開授業としている。

## III 授業評価

### 1. 各授業に対する子どもたちの評価

#### 1) 第 2 次性徴について

月経や射精のメカニズムについては、90%の子どもたちが「よくわかった」と答えながらも、ホルモンの概念をうまく理解できない子どもも多く、理解

力に合わせてわかりやすく伝える難しさを感じた。子どもたちの印象に残った内容として最も多くあがったのは、大学生が第2次性徴を迎えた時の様々な気持ちや体験談であった。その理由として、「大学生の体験を聞いて個人差があることがよくわかった」「ほっとした」「友だちをからかうことはよくないとわかった」などの感想が寄せられていた。

2) 受精について

受精のしくみについては、1名を除いて全員が「よくわかった」「わかった」と答えていた。ビデオ

(驚異の小宇宙Ⅰ.生命誕生)に対する感想が多く、映像でみる卵子や精子に「びっくりした」という内容が記載されていた。また、質問は他の授業に比べて最も多く、「双子はどうしてできるのか」「子どもができない人がいるのはなぜか」「受精できなかった精子はどうなるのか」「どうやって精子は(母親の)おなかに入るのか」など、数多く寄せられたため、時間内で対応できず、後日、回答集を作成してクラス担任に届けた。

表2 K小学校における性教育活動の実際

		平成16年度1学年111名(3クラス)	平成17年度1学年94名(3クラス)
5年次			
第1回	(日時)	平成16年10月6日	平成17年10月13日
	(内容)	第2次性徴について	第2次性徴について
	(目標)	①月経や射精のメカニズムを知る ②第2次性徴を迎える心構えや友だちへの思いやりを考える	①からだと心の変化と個人差について知る ②個人差や性差を受け止めながら友人関係を築くことができる
(方法)	1学年同時に実施。男女別グループワーク	1クラスずつ実施。大学生体験とグループワーク	
第2回	(日時)	平成16年2月9・10日	平成17年11月7・10日
	(内容)	受精のメカニズム	受精・生命の誕生
	(目標)	①異性に興味を持つことを自然なことで理解する ②性別を超えて他者を大切に思う気持ちを学ぶ	①受精と生命誕生のメカニズムを知る ②生命誕生の神秘と命の大切さを感じる
(方法)	③受精のメカニズムを理解する 1クラスずつ実施。ビデオ・図の使用	1クラスずつ実施。ビデオ・図の使用	
第3回	(日時)	平成17年3月1・3日	平成17年12月12・15日
	(内容)	妊娠・出産について	妊娠・出産について
	(目標)	①胎児の成長と出産までの母親の変化について知る ②生命の誕生の神秘と力強さを知り、自分の大切さを実感する	①胎児の成長と出産までの母親の変化について知る。 ②自分や周囲の命の尊さを感じる
(方法)	1クラスずつ実施。出産のビデオ・胎児と新生児の模型使用。	1クラスずつ実施。出産のビデオ・胎児と新生児の模型使用。	
6年次			
第4回	(日時)	平成18年2月15・16日	平成19年2月(予定)
	(内容)	薬物乱用の害と健康	薬物乱用の害と健康
	(目標)	①薬物乱用がからだに与える害を知る ②薬物の誘いから自分の身を守る方法を知る	①薬物乱用がからだに与える害を知る ②薬物の誘いから自分の身を守る方法を知る
	(方法)	1クラスずつ実施。グループワークとロールプレイ。	1クラスずつ実施。グループワークとロールプレイ。

3) 妊娠・出産について

「自分もこうやって生まれてきたことがわかってよかった」「赤ちゃんもお母さんもすごくがんばったことがわかった」「みんな(家族)の協力で命が生まれることがわかった」など、胎児の力強さと家族とのつながりについて書かれた感想が多かった。学生の作成したパネルや胎児・新生児モデル人形を使用した説明が分かり易かったという回答が多く見られた。

4) 薬物乱用防止について

薬物の害については1名を除いて全員が「わかった」と答えており、6名を除いて全員が、薬物の誘いを断ることが「できる」「たぶんできる」と答えていた。薬物の誘いを断る方法については、大学生同士の寸劇や子どもたちも参加させたロールプレイで実施したが、「大学生の劇がおもしろかった」など、授業を楽しんだ感想が多かった。

2. 4回の授業を終えた6年生による総合評価

6年次に合計4回の授業を振り返り、質問紙に答えてもらったところ、「大学生の授業を受けて、悩みが解決したか」という項目で、7割以上の子どもたちが、解決したと答えており(図1)、2次性徴を迎える子どもたちの悩みに対して、効果的な関わりができたことが確認できた。さらに、「大学生からもっと話が聞きたい」子どもは8割を占め、その主な理由として「もっといろんなことを聞いてみたい」「わからないことを教えてくれる」等があった。

また、「授業は楽しかった」という回答は100%を占め、その主な理由には「大学生とおしゃべりしながらできた」「大学生のアドバイスが良かった」「クイズや劇が良かった」「写真や模型が良かった」等があげられていた。

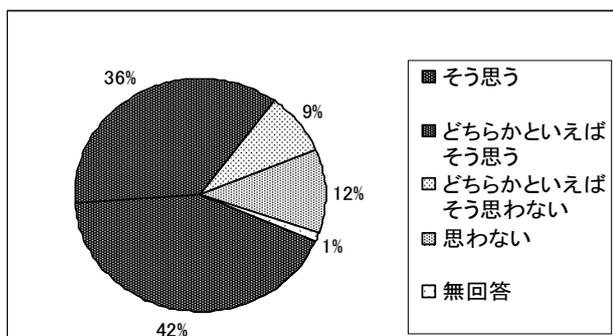


図1 大学生の授業を受けて悩みが解決したか (n=94)

3. 自己肯定感の変化にみる評価

平成17年度の1回目の授業後と2ヵ月後に実施した3回目の授業後の質問紙に、子どもたちの自己肯定感に関する項目を入れて比較してみたところ、「自分のことが好きですか?」という項目について、男女とも「どちらかといえば嫌い」「嫌い」を合わせた否定的な答えが減少し、「好き」「どちらかといえば好き」を合わせた肯定的な答えが増加していた(図2)。しかし、女子においては「好き」がやや減少し、「どちらかといえば好き」が増加していた。

IV 考察

小学生への性教育におけるピアアプローチと、その効果について述べる。

1. コミュニケーションを重視した活動展開による年齢の離れた子どもたちとの関係性の構築

各授業前に給食や休み時間を一緒に過ごしたこと、1回きりの出前講座ではなく、一連のテーマで継続的にクラス別授業を行ったこと、複数の大学生が小グループを担当する形で進行し、一人ひとりの子どもたちが大学生との会話をより多く体験できるよう配慮したことは、子どもたちの大学生への親近感・信頼感を深めることにつながった。このことは、児童から積極的な質問がみられるといった姿勢として現れた。その結果、子どもたちの科学的な興味・関心を引き出すことにつながったといえる。

2. 大学生が体験談を語ることによる共感的アプローチ

今回、性教育の対象となった小学校5・6年生という時期には、この1年間で女子の約半数が初潮を迎え、1割程度の男子が精通を経験するといわれている。その他にも乳房の発達や発毛など、2次性

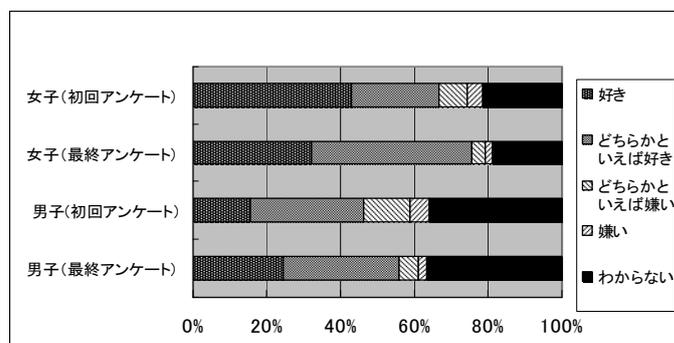


図2 自分のことが好きか (n=女子53、男子41)

徴による身体の変化が発現する時期であるが、2割前後の子どもがその個人差に悩んでいる<sup>9)</sup>。複数の大学生の体験談を実際に聞くことによって、子どもたちが具体的な個人差について知ることができた。そして、かつて自分と同じ気持ちを経験した大学生に親密感を抱くことによって、より真剣に友人への思いやりを感じることができたものとする。大学生が、より近い世代としてではなく、身近なお兄さん・お姉さんの存在として「ななめの関係」<sup>10)</sup>をいかすことによって、共感性を重視したピアアプローチが可能であることが示唆された。

### 3. 自己肯定感の向上を目的とした授業展開

小学校高学年は、からだの発育についての学習を通して、自己の性を肯定的に受け止める態度や相手の立場を考えて行動しようとする態度が養われる大切な時期だといわれている<sup>11)</sup>。「自分と相手を大切にしよう」というメインテーマは、授業の目的が、単なる知識提供ではなく、子どもたち自身に自分の存在の大切さを実感してもらいたいという大学生のメッセージが含まれている。すべての授業展開は、自分の存在と他者の存在の尊さでまとめている。今回、統計的な解析は行っていないが、性教育実施期間に、自分を好きだといえる子どもが増加したことが認められた。

しかし、女子において、全面的に自分を「好き」だと肯定できる児童が減少したのは、初潮の体験や妊娠・出産という女性が主役となる生理的変化を学ぶことが、女性性の受容に影響しているとも考えられる。中・高校生になると、女子生徒の10%程度は自己の性を自認できないというデータ<sup>12)</sup>もあることから、とりわけ女子児童における、きめ細やかな指導が必要であることを再確認した。

### 4. 看護大学生が実施することについての有用性

今回の授業で用いた教材には、学生の手作りに加えて、ビデオや模型など、大学で所有する教材を活用した。また、授業案や質問に対する回答については、大学教員から助言や資料提供を行った。このような専門的知識の提供や豊富な教材の活用に対しては、小学校教員からも一定の評価を得ており、看護大学生が実施する上でのメリットとなっている。

## V まとめ

大学生が小学生に行うピアアプローチ的性教育には、一連の効果がみられた。授業内外でのコミュニケーションにより、小学生が年齢差のある大学生に親近感を抱き、信頼関係を築くことができた。その結果、子どもたちの性に関する科学的情報への興味・関心を高め、生じたひとつひとつの疑問に対応することが可能となった。これは、性において個人差の大きい子どもたちに対して効果的なアプローチであった。さらに、年齢差を身近なお兄さん、お姉さんの存在としていかすことによって、共感・支持といったピアアプローチが可能となった。以上により、年齢差のある対象者に対しても、対象者との関係性構築に根ざしたプログラムによって、仲間教育としての効果が期待できると考える。

今後、継続的に授業を展開するにあたっては、小学生との関係性を構築するための時間の確保や大学生のコミュニケーションスキルを向上させることが必要となる。さらに、運営のためには、小学校側との時間調整の厳しき、マンパワー不足などの残された課題も多くある。これらの課題に向き合いながら、地域学校保健との連携による性教育システムの構築に取り組んでいきたい。

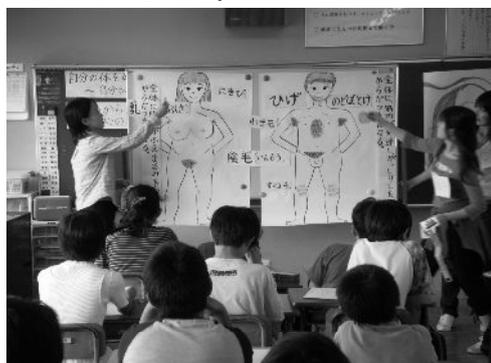


写真1 2次性徴の授業風景



写真2 手作り媒体で妊娠の経過を説明

### 文献

- 1) 松本清一、高村寿子：性の自己決定能力を育てるピアカウンセリング. p32、小学館、2002.
- 2) 渡邊至：「性に関するピアカウンセリング」による思春期の性行動に対する認知行動療法的アプローチ. 思春期学、23 (3) : 295、2005.
- 3) WHO 専門委員会編：思春期の人々へのヘルスニーズ. WHO: 46、1977.
- 4) 健やか親子 21 検討会：健やか親子 21 検討会報告書：pp4-7、2000.
- 5) 大家さとみ、栗原淳：性教育におけるピアエデュケーションの短期的効果 高等学校での性教育の実践を通して. 学校保健研究、48 (1) : 32-45、2006.
- 6) 宇野暢恵、荒木田美香子、戸川僚子：中学校を対象としたピアエデュケーションによる教育の有効性の検討 9 ヶ月までの追跡調査. 思春期学、23 (3) : 318-321、2005.
- 7) 秋野美恵子：地域におけるピアエデュケーションの試み「若者とエイズ in おたる」を実施して. 思春期学、23 (1) : 190-192、2005.
- 8) 内閣府：平成 18 年度 薬物乱用防止対策に関する世論調査. 2006.
- 9) 東京都幼・中・高・心身学級・養護学校の性意識性行動に関する調査報告：2005 年調査 児童・生徒の性. p22、学校図書、2005.
- 10) 清水凡生：総合思春期学. p5、診断と治療社、2001.
- 11) 同上. p3.
- 12) 前掲書 9). p10.

## **Sex Education Activities for Elementary School Children by Peer Educator Nursing College Students**

—Peer Approach to a Different Age Group and Evaluation of the Approach—

Yukiko HAMADA, M.H.S.<sup>1)</sup> Masue KOBAYASHI, M.N.<sup>1)</sup>  
Hitoko EJIMA, B.N.<sup>1)</sup> Tamami SATOU, H.S.D.<sup>1)</sup>

Peer education is characterized by two points. One is that its high educational effect can be achieved due to the empathy and support that are gained from a sense of camaraderie shared by the parties of the same generation. The other is that its goal is not merely to impart knowledge but to raise self confidence and self esteem as well.

Since the 2004 academic year, our college has been providing peer educator training to students and developing their sex education activities for elementary school children. The two-year sessions continued from the 5th to 6th elementary school year were evaluated based on the questionnaire responses and comments from the children to determine the effect of the approach.

The results were: 1) the activities with emphasis on communication to fill the age gap between the school children and the college students, helped build up a relationship; 2) an emphatic approach in which the college students shared their own experience with the children, facilitated the understanding of the lesson contents; 3) the lessons designed to enhance self acceptance resulted in more children's saying "I like myself."

These outcomes indicate that effective sex education becomes possible with a program designed to place importance on communication with the school children and with a peer approach stressing the camaraderie despite age disparity.

**Key words: nursing college students, sex education, peer approach, elementary schoolchildren**

---

1) The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing